

ぬちどうたから

ウチナー（沖繩）にて【PART1】

「ぬちどうたから」：「命どう宝」、命は何よ



29 名古屋北労働基準監督署長 鈴木 章之

りも大切なもの。命こそが尊い一番大切な宝、というウチナー言葉。今年も酷暑か。熱中症予防が声高に叫ばれる季節である。

以前、沖縄労働局管内の八重山署（石垣島）と名護署に勤務した。加速度的に暑さが増すこの時期は亜熱帯性気候のウチナーの記憶が蘇る。当名古屋北署にウチナー出身の若い労働基準監督官が2人配属されていることや米軍基地問題が大きく報道されていることもあってか、今年はより当時間が鮮明に思い起こされる。時間とともに美色に変化する珊瑚礁の海、白砂のビーチ、緑濃いマンダローブ、人情厚いウチナーンチュ（沖繩の人）、美ら島の言葉のとおり美しいウチナーは強烈なインパクトを与え続けている。

「涙そうそう」や「さとうきび畑」等ウチナーンチュが作詞作曲した歌や、ウチナーが舞台となっている曲を聴かれた方も多いと思うが、ウチナー



練習風景（右から2人目が筆者）

民謡は古くから永々と続いていく伝統文化であり、今も多くの若者達に受け継がれている。島全体に島唄が響いている感さえある。人が集えばオリオンビール（名護の工場が生産される地元産ビール）、そしてやはり：泡盛を飲みながら、三線に合わせカチャーシーを舞い、ひと時を過ごす。唄、踊りはウチナーンチュ一人ひとりに根付いており、事ある度に自然発生的に琉球民謡が奏でられ、老若男女を問わず踊りが繰り広げられる。また、長く琉球文化として独自の音楽体系が形成、伝承されている中であって、戦後は米国の統治下で欧米のロックミュージックと融合し、独創的な音楽が醸成された。ビギンやりんけんバンドなどはその代表格でもある。

名護署勤務当時のことだ。名護市はヤンバルと呼称される沖縄本島北部に位置している。ヤンバル（山原）は、山々が重なり、森が広がる地域という意味で、ヤンバル クイナという天然記念物に指定されている鳥が生息していることでも知られている。 沖縄局に琉球舞踊（古典）三線演奏の無形文化財伝承者として沖縄県教育長から認定された職員がいた。その彼が名護署に赴任、赴任後間もなくして、師範がいるのに三線を習わないのは如何なものか、との声が当たり前のようになり、休日を利用して自宅で三線教室が開かれるようになった。 何かにつけて文句、言い訳の多い出来の悪い弟子達（筆者がその筆頭格であったことは言うまでもない）にもかかわらず、丁寧な指導により、数カ月後には古典舞踊のオーピングの導入曲や「安里屋ユンタ」等代表的な曲を、下手ながらも何とか全員の音色が合うまでとなったときのことである。（続く。表題の意図は次回に！）